

高齢女性の育児支援活動を通じた社会参加に関する事例研究

内山 淳子
(佛教大学(非))

【要旨】

本稿では、高齢者の学習と社会参加の事例としてシルバー人材センターを母体とした高齢女性による子育て支援活動を取り上げる。参与観察および会員の記述式意識調査から、高齢者が社会的活動を通して学ぶことの有効性を検討した。その結果、準備学習を経て仲間と共に子どもや保護者に貢献する活動は、会員に自尊感情や精神面および健康面における活力をもたらすとともに、高齢期の生涯発達課題達成にも寄与していた。さらに、活動の継続に伴い保育施設を利用する保護者や子どもの信頼が得られ、地域のコミュニティが形成されつつあった。

高齢者の活動では個人の多様さを尊重し、学びあう姿勢が重要であった。近年、アクティブ・エイジングの理念に基づき、施策にも高齢期の主体的な生き方が反映されている。今後、高齢者の特性に配慮したさらなる学習支援が求められる。

はじめに

高齢社会を迎え、高齢期の「生活の質(QOL)」への関心が高まっている。高齢者には身体的機能の低下がみられる。しかしながら、仕事や子育てから解放され、蓄積された能力を活かす余裕のある時期とも考えられる。充実した高齢期には、福祉・医療面での支援のみならず精神面の自立が不可欠である。近年、国内外で主体的な高齢期をめぐる研究と実践が累積されつつある¹⁾。これらの鍵となるのは「学習」と「社会参加」である。

塩谷久子は、ロンドン大学教育学院の報告書『幅広い効用をもたらす学習のモデル構築と評価』に示された「学習が5つの領域—健康、エイジング、家族、犯罪、シティズンシップ—にもたらす効用」について、高齢期と関連させて論じている²⁾。その結果、高齢期の学習は個人を豊かにするばかりではなく社会全体へと還元される効用があることを示した。さらに、課題として高齢者の学習支援プログラムの充実とその効果に関する学習参加者等からの実証的なデータの蓄積をあげている。

2004年に行われた第7回世界高齢者団体連盟国際会議においては、「結論声明—アクティブ・エイジングのシンポジウム」が提出され、高齢者を「お世話される客体」から「自ら生きる主体」へと捉え直すことが確認された³⁾。しかし、佐々木英和は、この会議に高齢期の生涯学習が浸透していることを認めながらも、1)生涯学習は生きがいや健康を保つとされる具体的根拠が不足しており、2)生涯学習は経済的・時間的にゆとりのある人向け、などの限定的なイメージのままに用いられがちであり、3)学習の成果を十分に発揮して活躍するという観点が弱い、という点を指摘している。

わが国の高齢化の特徴は、少子化と相まって高齢者人口比率の急速な増加にある。加えて、生活形態は核家族化により高齢者夫婦、および高齢者単身の世帯数が増加し、地域や

家庭内での他者との関わりにおいての高齢者の役割が少なくなっている。内閣府による「高齢者の生活と意識—国際比較調査」では、1981年から5年ごとに日本を含む数カ国の高齢者意識を調査している。2000年の調査⁴⁾では、「家族・親族の中の役割」について、「家事」「小さな子どもの世話」「家族・親族の相談相手」「家計の支え手」「家族や親族関係の長」のすべての項目で、役割を果たしていると答えた高齢者の割合は、アメリカが日本の2倍近く高い。逆に、「特に役割なし」と答えた人の割合は、日本が7倍以上高くなっている。しかも、日本において、前述の役割をもつと感じる高齢者の割合は19年の間に減少している。高齢期の生き方が問われる中、実際には役割感をもてない高齢者が増加している。このような状況において、高齢者の生きがいはいかに実感されているかを問題としたい。

1. 研究の目的・対象・方法

(1) 本稿の目的

そこで、本稿では高齢者が社会的活動を通して学び、生きがいを創出する生涯学習の場として、高齢者による子育て支援活動の事例を取り上げる。

社会的にみた高齢者による子育て支援は、高齢者の活用促進という福祉面と、経験豊富な高齢者による地域の親子への支援といった教育面の双方から注目される。厚生労働省による「ゴールドプラン 21」「高齢社会対策大綱」では公的介護保険が検討・実施されたが、他方で元気な高齢者、いわゆるヤングオールドの活用が課題となった。その一方、教育面では、家庭教育支援の援助者として「地域の力」が必要とされている。「今後の家庭教育支援の充実についての懇談会」(文部科学省.2002)では、「社会の宝として子どもを育てよう」として、子どもを育てるネットワークを地域社会に広げる提案を行った。さらに、次世代育成支援対策推進法(厚生労働省.2005)では、地域の子育て支援を地方自治体の行動計画目標の一つとしている。子育て支援活動は高齢者の新たな役割として期待されるのである。

本事例は社団法人シルバー人材センターを母体とした活動であるが、有志参加会員の自主的な運営に基づいたボランティア活動の要素が多く、高齢者が「なすことによって学ぶ」参加体験型学習の一例と考えられる。本稿では活動の参与観察と会員の意識調査を通して、高齢者の社会参加を通じた学習および地域社会への貢献について考察する。さらに、この活動を通じた学習が高齢期の発達にもたらす有効性を検討する。

(2) 研究の対象

本研究対象である子育て支援事例は、京都府下にあるシルバー人材センターに附設して実施されている高齢女性による育児支援活動である。2002年5月より認可外保育施設として生後6ヶ月から小学生までの子ども10名を定員とする一時預かり保育、および子どもの送迎等を有料で行っている。

シルバー人材センターは、60歳以上の男女会員に対して自治体および個人の利用者から受注した仕事を分配し、利益を配分金として支給する。当初、当センターには「子守り」の依頼があったが、プライバシーを重視する若い母親のニーズに合わず需要が伸び悩んでいた。そこで、新しい形の子育て支援として「一時預かり保育所」の設立が提案された。

設立準備は、センター職員と保育士有資格者の会員が当たり、同様の活動経験があるセンターの視察、施設および傷害保険の整備、保育講習の実施等を行った。参加会員は既に入会していた人への呼びかけに加え、市広報でも募集した。希望者は後述の5日間の子育

て講習会を受講した後、2 回の実習を経て活動に参加することができる。

会員への配分金は開業当初には利用者数に応じた歩合制だったが、2003 年度より国庫補助対象事業となり、現在は一定額が保障されている。補助金の支給を開始して以降、全国のシルバー人材センターにおいて子育て支援事業は増加している。

2005 年 10 月現在、本子育て支援活動の参加会員は 56 名の女性である。このうち保育士の有資格者が 7 名である。会員の平均年齢は 69.2 歳(最高年齢 83 歳、最低年齢 61 歳)である。活動参加までの職業経験は、「フルタイムの被雇用者」が 39%、「自営・家族経営」が 14%、「パートタイム」が 27%、「主婦」が 20%であり、入会前に有職者であった会員が多い。

現在の社会活動の状況は、一時預かり保育だけに参加する会員は 15%である。69%の会員は在宅子守、子どもの送迎、一般家庭の家事援助のいずれかの仕事もしている。また、16%の人は他のボランティア活動にも参加しており、社会活動全般に意欲的な様子がみられる。

(3) 考察の方法

2005 年 4 月～10 月の期間、当該活動に参加して観察を行った。同時にセンター職員および会員にインタビューを行った。さらに、会員に対して「活動参加による意識変化」の視点から構成した記述式アンケートを実施し分析した。本対象は 1 団体 50 名程と少数であるため、各会員の意識をより鮮明に反映させるため自由記述法を選択した。これらの結果から、高齢者の社会参加における学習効果を検討し、活動過程のモデル図を作成し考察した。

以下に、参与観察およびインタビュー調査の結果、記述式アンケートの調査結果の 2 点について報告する。

2. 調査 1ー活動への参与観察およびインタビューによる調査結果

当該対象について参与観察し、同時に面談した結果を以下の 4 点に分けて報告する。

(1) 日常の保育活動

日常の活動内容は、①託児室内「一時預かり保育」、②子どもの自宅での「在宅保育」、③依頼に応じた子どもの「送迎」である。「一時預かり保育」では、4 人 1 組のチームで会員のローテーションが生まれ、保育士資格者が最低一人はこれに参加する。有資格者以外の会員の参加頻度は、週 1 回程度 1 回 4 時間の保育活動となる。

保育室の一日の業務の流れは開館(8 時)、掃除、利用予約の電話受付、母親の申込書記入の適否の確認、利用後の料金徴収、子どもの食事・おやつの確認と補助、保育活動、日誌の記入、閉館(22 時)である。この他、会員のローテーション表作成、月 1 回の全体会開催などが加わる。会員も昼食を持参するが、保育に忙しいためおにぎりが良いとする会員がある。独り暮らしの会員が旬の得意料理をメンバーのためにも持参する光景がみられた。なお、活動の前には会員が自分の体調を確認するチェック表、子どもの虐待を早期発見するためのチェック表が用意されている。

(2) 子育て講習会

子育て支援活動に応募した会員は、活動参加前に表 1 のような子育て講習会プログラムを受講した。講習内容は一時預かり保育に必要な知識・技能に関するものである。講師として保育関係専門家(講義内容①②③④⑥)、小児科医(講義内容⑤⑧)、栄養士(講義内容⑦)、消防署員(講義内容⑨)を依頼している。会員は、受講後に昼・夜 1 回ずつの実習を行い、参加の意思を確認して活動を開始する。

表 1 子育て講習会のプログラム (一例)

	午前	午後
1 日目	①現代の子育て事情、今求められる保育者とは	②保育者としての心構え
2 日目	③子どもの社会性と生活習慣	④子どもの遊びと遊ばせ方
3 日目	⑤子どもの心と身体の発育について	⑥一時保育から親の心に寄り添う保育
4 日目	⑦哺乳と食事・病時の食事など	⑧子どもの安全と病気、病気の子どもの世話
5 日目	⑨緊急時の対策と応急処置	

講習会を受けた会員の感想には、「現代の母親の育児に対する態度などの講義では、ストレスが相当強いと聞き大変だなと思った。」「今この時点で苦しんでいる、助けを求めている親に手助けをしたい。今の子どもの母親は私達の子ども達である。その母親を育てなければならない。」等にみられるように母親への関心を示すものがある。また、「三人の子どもを育てたが、当時とは親の考え方も育児指導も違う。昔は育児の辛いことはたくさんあったが忘れていた。講習を受けて孫の子守にも役立っている。」「すっかり忘れていた妊娠中の注意や、乳児から幼児へと成長する子どもの大切さを改めて感じた。人間として基本的生活をおろそかにしてはいけない。専門の先生方に本当に分かり易く教えて頂いてよかった。」といった子育てを見直す機会になっている。保育技能の習得だけではなく、保育者としての心構えが生まれている。

(3) 全体会

全会員が毎月 1 回集う全体会は、会員の自主運営に任されており当活動の基盤でもある。活動の報告・注意事項を確認し合い、また保育の技能を高める勉強会も兼ねている。運営は 7 人の保育士有資格者と会員から選出された実行委員が中心となり、司会を始め当月の活動課題点の討議、当番ローテーション表の作成・配布、会計報告、遊び方の講習などを行う。全体会は保育室に隣接した会議室で行われる。以下は 2005 年の全体会の一例である。

例 1：5 名の実行委員選出の選挙、新委員紹介、折り紙講習、健康診断を受診したかの確認、保育業務の確認。

例 2：消防署員が来所しての救急蘇生法の講習会、乳幼児の心肺蘇生法を全員が実習、火災時の消火器訓練(屋外)、保育業務の確認。

例 1 の会議中に、日ごろから在宅保育および送迎を利用している保護者から、翌日に両親が留守をするための在宅保育を依頼する電話が入った。しかしながら、子どもが熱を出している状況での保育であった。本事業の子育て支援活動では、病児の保育は規定上禁止されている。全体会の中で話し合いがもたれ、保護者には医師が常駐する施設を参考として紹介することとなった。また、折り紙講習では、元保育士の会員、児童福祉施設でのボランティアを経験している会員が講師となり、子どもに人気がある折り紙を他の会員に講習した。各自が折り紙を手にして和気あいあいと実習を行った。

例 2 ではセンター職員も同席し、定例の消防署員による乳幼児の救急心肺蘇生法の講習、および消火訓練が 2 時間にわたって行われた。救急救命士と有志会員による乳幼児の人体模型を使ったデモンストレーションを見学した後、各自順番に実習を行い救急時の対応を確認し合った。

(4) 一時預かり保育の利用者

保育室を利用する子どもの年齢は生後6ヶ月から12歳までと規定されている。入園前の乳幼児が多く、ミルクや離乳食を持参する。夏休みなど幼稚園や学童保育が休暇の時期には園児や小学生が増え、出勤途中に子どもを預けて勤め先に向かう保護者もある。

保育室は子ども達にとって高齢会員と触れ合う場であると共に、年齢差のある子ども同士が打ち解けあえる場にもなっている。たとえば乳児のオムツを替える様子を2歳児が興味深そうに見ているといった光景がみられ、和やかな雰囲気の中で保育が行われている。

依頼する保護者に資格は設けず、予約がない場合でも定員内であれば保育を依頼することができる。産前産後にきょうだいをみてもらいたい母親、不規則な仕事や一時的な用事で両親とも多忙な時の子どもの世話、学習活動中の保育を依頼する母親など様々な要望がある。一例として、飲食店経営の家庭から、夜間に店が忙しくなってくると電話で保育依頼がある。このように若い保護者から頼りにされているのは、育児経験が豊富な高齢女性が保育をしてくれる安心感があるからであろう。さらに、人づてに需要は増えているが、それは保育料が比較的安価であり、臨機応変にニーズに応じてくれるためと思われる。

この活動では、保護者に対し子どもを預ける理由を尋ねていない。よって気軽に利用できる、また育児の悩みも自然に相談がしやすい面がある。公的な保育機関では対応できないサービスを提供しており、若い母親に対する教育的な役割も期待される。

3. 調査2—会員への記述式アンケートの調査結果

(1) 調査の方法

参与観察およびインタビュー調査において参加者の様子を把握したのち、さらに焦点化した調査を実施するために、2005年7月の全体会に出席した会員47名を対象として、活動参加に対する意識を問う記述式質問紙調査⁵⁾を依頼した。後日、郵送および施設内の私設ポストで回収し、39名(回収率83%)の有効回答を得た。

(2) 回収票の整理

アンケート回収後、①活動に参加した動機、②活動の中のやりがいと楽しみ、③活動中の困難や不安、④活動参加が会員にもたらした変化、の4項目について、自由記述内容を分析した。すなわち、「子ども」「自分自身」「組織」などの対象に関する記述について、さらに内容を分類して検討している。一回答に複数の内容を含む場合もあるため複数回答となっている。またそれぞれの質問に対しての無回答は各質問の有効回答から除いている。

(3) 結果と考察

①「子育て支援活動に参加した動機・きっかけ」に関して

自発的に活動に参加した会員に対し「参加の動機・きっかけ」を尋ねた。39名の有効回答を分析した結果、複数の内容を含む回答があったため、記述総数は61件となった(表2)。

動機の上位は、「経験を活かしたい」「活動参加への希求」「定年退職の転機」などの自分自身に関する内容である。「経験」は、母親としての子育ての経験と、保育士としての保育経験に二分される。ある会員は「自分の兄弟、子どもや孫にしてきた事を役立てたい」としている。子育てへの自信と、若い世代へ経験を引き継ぎたいという意味がみられる。

「定年退職」の節目を参加のきっかけとする例に「73歳まで少しずつでも仕事をしてきたが、引き時も大切と辞めた。しかし、やはりさびしく手持ち無沙汰な日々が嫌になり活

表2：子育て支援活動参加の動機・きっかけ

対象(n)	内容(n)	回答例
自分自身(31)	保育経験(8)	・50年前に保育の資格を取得し、児童福祉施設で仕事をしていた。
	活動参加(7)	・社会とのつながりを持ちたい。・ずっと子育てのボランティアがしたかった。
	定年退職(6)	・退職後のゆとりの時間を役立てたい。
	その他の経験(10)	・子育て期が遠くに過ぎ去り、くもりを残したが若い世代に伝えていきたい。 ・ボランティアの電話相談をしていたとき虐待に苦しみ両親を知り、役に立ちたかった。
子ども(12)	子ども好き(8)	・子どもが好きだから。
	関心(4)	・自分の子育てを保育所と母に支えられてきた。退職後ベビーシッターの勉強をした。
孫(7)	経験(2)	・孫が大きくなり他人の子どもさんでも経験を生かしたい。
	学習(3)	・孫が生まれ、育て方を勉強直したいと思い参加した。
	その他(2)	・子ども好きだが、孫が遠くにるので。
母親(2)	支援(2)	・転居先で子育てに苦労した身内の経験から、地方出身の母親の役に立ちたいと思い。
媒体(7)	広報(3)	・市の広報で知った。
	センター(4)	・家事援助をしていたとき、子育て講習会を勧められた。
その他(2)		・現代の親の育て方に疑問があった。

動に参加した」という会員がある。加齢により仕事の第一線から退くべきかを迷いつつも、社会的な活動に意欲をもつ人にとって、この子育て支援活動は居場所となったのである。

「子ども」に関する動機からは保育活動を通して子どもと触れ合う機会をもちたいという思いが伺われる。一方、「孫」に関する記述は自分の孫を想定して書かれたものであり、一般的な子どもへの関心に比べより具体性を帯びている。その内容は「孫を育てた経験」と「孫を育てるための学習」が中心である。活動の動機は自分の楽しみや向上に対する欲求に増して、他者と交流し役立つことを期待するものが多くみられる。

また、「シルバー会員がどのような生き方をされているのか、自分に活かせるものはないか知りたかった」「退職後、仕事以外で友人がほしかった」など、友人を求める例もある。

②「活動の中で参加してよかったと思うこと、やりがい」に関して

次に、「子育て支援活動に参加してよかったと思うこと・やりがい」を尋ねた結果、有効回答 34 名の回答中に 56 件の記述内容があった(表 3)。「参加動機」(表 2)で多数を占めた経験を活かしたい、子どもが好き、という動機が、活動の「やりがい」に反映している。たとえば、動機を「独り暮らしになって誰とも話をする機会がなく、子どもと触れ合いたかった」とした会員は、「幼児の笑顔がなんともいえない私の喜び」と記述している。

さらに、活動に参加したことで仲間と出会えた心強さや喜びが書かれている。「色々な人達に会えて自分の知らないことを勉強している」「多くの会員の子どもへの対応が勉強になる」とする会員のように、仲間とともに行う活動により、自分の世界が広がる学習の喜びも実感されている。多くの会員が活動前には予想していなかった学習効果が生まれている。

子どもの成長、笑顔、母親の支援に関する記述からは、異世代とのコミュニケーションの楽しさや、自分の活動が具体的に役立つ張り合いが記されている。経験が活かされ、活躍が認められる「やりがい」の実感は、会員に自尊感情をもたらしめている。

表3：活動の中で参加して良かったと思うこと・やりがい

対象(n)	内容(n)	回答例
自分自身(21)	変化(8)	・小さな子どもたちと接して若返り、やさしい気持ちを持てるようになる。
	活動参加(6)	・他人のために少しでも役立って喜んでいただけたら嬉しい。 ・(保育士)定年後もこのような活動の中に居られることは最大の幸せ。
	経験を生かせる(4)	・他人様の子どもにも良し悪しを教えてあげられること。 ・ユーモアを子供に教えて喜ばれたとき。
	ハリがある(2)	・当番にあたる日に合わせて体調を整えることを考えるのが幸せ。
子ども(15)	接する(6)	・4時間の仕事で子どもさんと気持ちが通じること。
	成長(5)	・きかんぼうの子どもさんが近頃よく人の話を聞いてくれるようになった。
	笑顔(4)	・幼児の笑顔がなんともいえない喜び。血縁に関係なくどの子も私たちの宝。
仲間(7)	出会い(4)	・高齢になってからこんなに友人が出来るなど今まで思っていなかったのが嬉しい。
	学び(3)	・それぞれに個性や特技をもつ会員と話し、いいところを見習い勉強したい。
母親(4)	支援(4)	・母親が助かったという子どもを引き取りに来るとき。
その他(3)		・まだ日が浅いので慣れることで一杯。
特になし(2)		

③「活動の中で難しいと思うこと・不安な点」に関して

「活動中の困難・不安」の設問に対し 31 名の回答中に 53 件の記述内容があった(表 4)。

困難・不安を感じる対象として最も多いのは「子ども」に関してである。なかでも活発な幼児に対して「不意の事故や怪我」を心配する内容が半数を占める。乳幼児を預かる責任の重大さを感じる会員が多いといえる。「子どもへの接し方」では、表中の回答例の他に「子どもの個性を活かした遊び方を考える」や「子どもは皆敏感なので心から接するよう心がける」等があり、子どもへの対応に工夫しながら真剣に取り組む様子が伺える。

表4：活動の中で、難しいこと・不安な点

対象(n)	内容(n)	回答例
子ども(24)	不意の事故・怪我(12)	・事故がないように心がけ、緊張感でいっぱい。 ・子どもが怪我をしないよう気を遣う。
	泣く子への対応(6)	・泣き止まない子どものお世話
	子への接し方 (6)	・自分が育てていない男の子との遊び。・おもちゃ、本、ビデオの与え方。
組織(14)	協力体制(10)	・人生経験豊富な会員間の協力体制。・活動方針が人により違い難しい。
	運営方法(4)	・日々利用者が把握できないこと。・50人という組織の経営の難さ。
自分自身(5)	体力(3)	・自分がいままで活動ができるか不安を感じる。
	注意力(2)	・お昼時の子供の荷物を違いやすい。
特になし(4)		・子どもが好きなので難しいとは思わない。
		・資格のある方がいるので不安はない。

一方、組織に対する記述も見られる。表 4 の「組織 - 協力体制」の回答例にあるように、会員は人生経験が豊富なために考え方も様々であり、体力面にも個人差がある。そのため

意思の疎通や組織運営に不安を感じている。しかしながら、これは表 3「活動の中のやりがい」に見られた、「仲間との出会い」「仲間による学習」の喜びと表裏一体であろう。仲間との交流は気苦労を生むこともあるが、同世代の人と協働する意義にもつながるのである。各会員が、より良い集団保育活動には協力が必要であることを自覚しているために、組織が重要視されていると考えられる。また、自分自身の体力や注意力に対する不安も挙がっている。活動の中では、日常生活では必要とされない課題の解決にも対面する。これは現在の体力面・精神面での活動能力に気づき、再認識する機会にもなっている。

このような結果から、高齢者が社会参加活動において感じる困難・不安は、①課題への取り組みに真面目であり責任感が強い、②意思の疎通に困難を感じやすい、③活動によって現在の心身の状況を認識する、といった高齢者特有の傾向によるものと考えられる。

④「子育て活動に参加して自分または日常生活が変わった点」に関して

「子育て支援活動に参加して自分または日常生活が変わった点」に対して、有効回答 28 名の回答中に 31 件の記述内容があった(表 5)。

表5：子育て活動に参加して自分または日常生活が変わった点

対象(n)	内容(n)	回答例
自分自身の変化 (14)	精神面の変化 (10)	・両親・夫・息子を亡くし、娘と嫁いで一人になった時活動に参加して生きがいになった。 ・仕事に出かけるという緊張感があって楽しい。
	身体面の変化 (4)	・子どもたちの元気な顔を見て忙しく過ぎ、落ち込んでいる暇がなくて健康を取り戻した。 ・健康に倍も気をつけるようにしている。
日常生活の変化 (12)	子への愛着 (6)	・バスや地下鉄の中でも子どもが気になり、声をかけたりする。 ・子どもに目が行き、お母さんが疲れていないか顔を見るようになった。
	習慣(5)	・手や服を清潔にしたりした。・夫の家庭での協力が多くなった。
	母親への理解(1)	・若い母親の気持ちが少し理解できたかと思う。
感謝の気持ち(3)		・皆様とお話をする中で人生色々不服の多い自分を反省し、家族に感謝する。 ・同年齢の方たちと毎日を送れて幸せ。
仕事観の変化(2)		・保育士時代の延長のようだが、規則におおらかになった。
その他(2)		・以前に比べて活動意欲が薄らいできたように感じる。

これらは、表 2「活動参加の動機」、表 3「活動の中のやりがい」、表 4「活動の中の困難・不安」を経て会員が実感している意識変容であり、参加による学習効果と考えられる。

自分自身の変化では、精神面での充実感が感じられる。また、活動を続けるために健康でありたいと願い健康増進にも寄与している。日常生活の変化では、活動を離れた生活時間においても子どもや母親へ対する愛着と気遣いが見られ、保育に携わる誇りが芽生えている。また、記述には「幸せ」「有難い」という言葉が多く使われ、活動に参加し子どもや仲間と触れ合う喜びは、現在の状況や周囲への「感謝」の気持ちに通じていると思われる。

4. 考察

本稿では子育て支援活動に参加する高齢女性の活動および意識調査から、その意義と学習効果を検討した。会員は「仲間がほしい」、「自分の子育て経験を役立てたい」、「子どもと

触れ合いたい」という希望を、活動に参加することにより実現していた。しかしながら、活動の中では「人間関係がむずかしい」、「個性の強い子どもやお母さんにどこまで注意するか迷う」、「子どもをまず受け入れるよう努める」などの課題に直面することになる。

このような新たに生まれた課題を社会的な活動を続けることで消化し、「子ども達や会員に出会えたことを感謝している」、「当番のために体調を整えることが幸せ」、「子育て支援が生きがいである」とする会員は、活動を通して自己教育を行っていくものと思われる。身体機能への不安が大きくなり、日常的な人間関係は狭くなる高齢期であるが、自ら社会に関心をもとうとする活動は多くの会員に満足感をもたらしていた。

さらに、会員の回答には、活動に参加できること自体に感謝する記述が多くみられた。自ら志願して入会し、新しい出会いを経て社会的な役割を自覚する喜びは、肯定的な感謝の気持ちに通じている。これらから、子育て支援活動参加による高齢女性の活動過程は図1のようなモデルで考えられる。

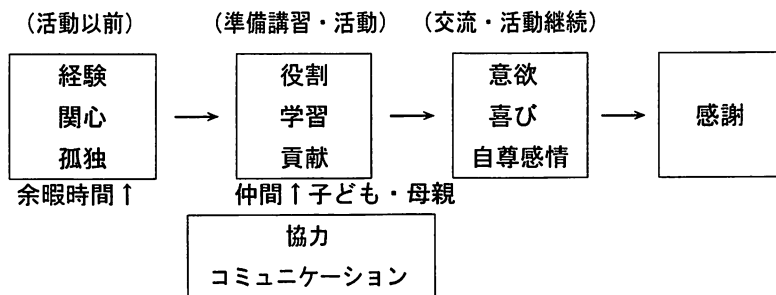


図1 活動過程のモデル

ニューマン&ニューマンは高齢期の心理社会的危機の達成を「統合」としたエリクソンの生涯発達理論⁶⁾に基づき、さらに具体的な高齢期の発達課題を提唱している。それは、1)老化にともなう身体的変化に対する対応、2)新しい役割や活動へのエネルギーの再方向づけ、3)自分の人生の受容、4)死に対する見方の発達、である⁷⁾。図1の活動過程からは、2)および3)の発達課題に対する有効性が認められる。

会員は、経験を活かして社会的活動に貢献できることを実感する中で、生き生きとした自分を発見し、日常の生活にも意欲的になっていった。これらの過程は「2)新しい役割や活動へのエネルギーの再方向づけ」に関与するものと考えられる。また、子どもと触れ合い、仲間を得てコミュニケーションの場に参加することは、高齢会員に安心感と感謝の念をもたらしていた。すなわち、自己を肯定的に振り返ることができ、「3)自分の人生の受容」の達成に寄与すると考えられる。しかし、これらは参加者が社会や個人と積極的にかかわってこそ生まれる学習であろう。

事例からは、高齢者の社会参加活動の課題として以下があげられる。

参加会員は生活歴、仕事歴が様々であり、活動に対する考え方やコミュニケーションのとり方、さらに体力や機敏さにも個人差が大きかった。これより、高齢者の活動の前提にはお互いの違いを尊重して「学びあう」姿勢がより重要になる。しかしながら、各会員の主体的な参加意識は自尊感情、さらには活動意欲に通じていた。よって、活動の維持に向

けて成員の主体性に配慮した継続的な教育支援と、経済面・設備面での支援が重要である。

今回の事例研究は、高齢女性の子育て支援団体に対する質的な調査に拠るものである。そのため限定的な結果ともいえ、今後、高齢者の社会参加および学習の対象を男性高齢者や他種の活動にも広げた検討が必要である。

多様化する高齢者に対応し、施策の進展にもアクティブ・エイジングの理念が反映している。厚生年金支給開始年齢の引き上げにともない定年の延長が行われるなど、高齢者の社会参加は一層促される方向にある。しかしながら、円滑な高齢期の社会参加のためには高齢者自身の特性を利点として活用できるような支援と方策が重要になる。

今回の事例においては、活動が持続するにつれて利用する保護者や子どもの信頼が得られ、子育て支援活動を中心とした地域のコミュニティが形成されつつある。地域の中に高齢者の役割を見出しながら、コミュニティとして広がる高齢者の様々な生涯学習の場は、今後高齢者がより善く生きるためにさらに不可欠となると考えられる。

注記・引用文献

- 1)たとえば、Erdman, B. palmore., *Ageism: negative and positive 2nd ed*, Springer Publishing Co, 1999. (鈴木研一訳、『エイジズム—高齢者差別の実相と克服の展望』明石書店、2002) など。
- 2)塩谷久子「高齢期に『幅広い』効用をもたらす学習」～ロンドン大学教育学院の報告書から～『日本生涯教育学会論集』26、2005、pp. 79-88。
- 3)佐々木英和『「アクティブエイジング」の世界的潮流から『活寿齢大国ニッポン』へ—第七回世界高齢者団体連名国際会議のポイントおよび未来展望—』『社会教育』日本社会教育連合会、2005. 1、pp. 10-15。
- 4)内閣府「高齢者の生活と意識—第5回国際比較調査結果報告書」ぎょうせい、2002。
- 5)実施した記述式質問紙の項目の例：
 1. なぜ「一時保育活動」に参加しようと思ったのでしょうか。また、シルバー人材センターに入会した動機は。
 2. 準備講習の中で印象に残っている事柄や内容、現在役に立っていることは何ですか。
 3. 活動に参加してよかったと思うこと、やりがいは何ですか。
 4. 活動の中で難しいと思うこと、不安に感じることは何ですか。
 5. 子どもやお母さんに接する中で何か学んだことはありますか。
 6. 活動に参加する前と参加中の現在とで、ご自分(または日常生活)が変わったことはありますか。
 7. 活動の中で、希望すること・提案がありましたらお書きください。
 8. 現在の生きがいは、楽しみは何か。
- 6)エリクソン, E. H.、エリクソン, J. M.、キヴニク, H. Q. (朝長正徳・朝長梨枝子訳)『老年期』みすず書房、1990、pp. 57-59。
- 7)ニューマン, B. M.、ニューマン, P. R. (福富護典訳)『新版生涯発達心理学』川島書店、1998、pp. 452-465。